東京大学のサッカー

闘魂90年の軌跡

90周年を迎えた東京大学ア式蹴球部

開幕から3連勝を飾り笑顔で応援席に向かう選手達
対山梨大 2008年９月14日

対日大生資 2008年８月31日

前線での厳しいチェックでボールを奪う
対創価大 2008年９月7日

（青と黄色のユニフォームが東大）

最終ラインでのディフェンス
対山梨学院大 2008年９月21日

キックオフのホイッスルを待つ
対上智大 2008年10月12日

（上）GKのポジションをみてゴールを狙うが
（下）ゴールポストをかすめたがゴール成らず
対桜美林大 2008年９月28日

応援部の声援を受けて攻め上がる
対日大文理 2008年10月19日

相手コーナーキックを東大GKがキャッチ
対成城大 2008年10月26日

❶藪内監督
❷秋季リーグ開幕戦の先発メンバー
❸鈴木コーチ
❹検見川合宿
❺秋季リーグ最終戦後、4年生の記念撮影
❻女子マネージャー
❼試合前のチェック
❽練習風景
❾給水ボトルとバケツ
❿⓫部室
⓬御殿下グラウンド全景

地域の子供たちとの交流

第7回東京大学ホームカミングデイ　2008年11月15日

10年後、15年後の東大ア式蹴球部員としての活躍が期待される

1930年　極東選手権大会蹴球競技で1位

東大主力の日本代表が国際大会で初のタイトル

東京帝国大学ア式蹴球部（東大サッカー部）は、1926年（大正15年）から1931年（昭和６年）まで、関東大学リーグで６年連続優勝し、日本サッカーの最高レベルにあった。

1930年（昭和5年）に東京の明治神宮外苑競技場で行われた第９回極東選手権大会の蹴球競技に出場した日本代表チームは、東大主力で編成され、当時アジアのナンバーワンだった中国と３－３で引き分け、１位を分け合った。

日本のサッカーが、公式の国際タイトルで１位になったのは、これが初めてだった。

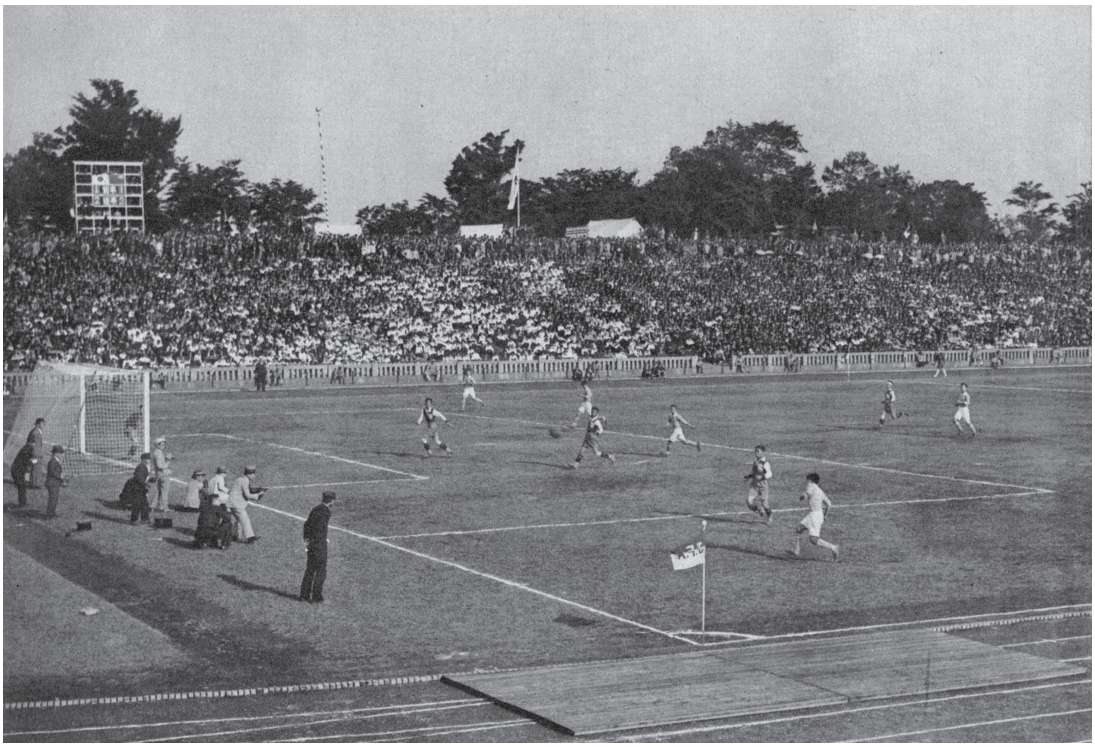
写真は日本対中国（1930年5月29日）。日本の攻撃を中国のゴールキーパーが防ぐ。左は手島志郎、中央は篠島秀雄。それぞれのサインがある。

篠島秀雄邸の応接間に飾られていたもの（春枝夫人提供）

東大主力の極東大会優勝（1930年）

日本対中国。73分、篠島秀雄のゴールで日本が３点目。３－２と勝ち越す。（昭和５年６月10日号）

極東選手権をめざす代表候補の石神井グラウンド合宿で。ユニフォームの胸に［帝大］の文字がある。（昭和５年５月１日号）



日本対中国。日本が左から攻め込む。（昭和５年６月10日号）

石神井合宿での練習風景

日本対フィリピン。日本７－２で圧倒。
５月25日・神宮競技場（昭和６月10日号）

関東大学リーグ　６連覇の時代

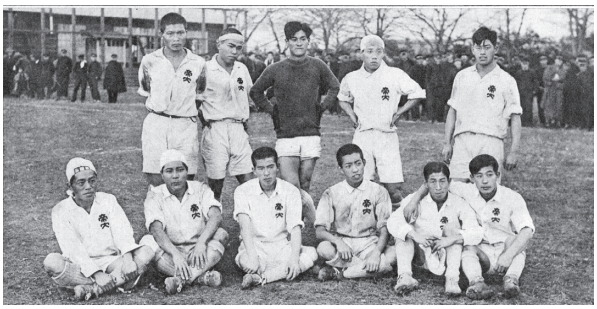
昭和５年度の卒業生を送る会。中央は末広部長。東大御殿下グラウンドで

極東大会出場の日本代表チーム（神宮競技場）

昭和４年、英国軍艦乗員チームとの試合で（神宮競技場）

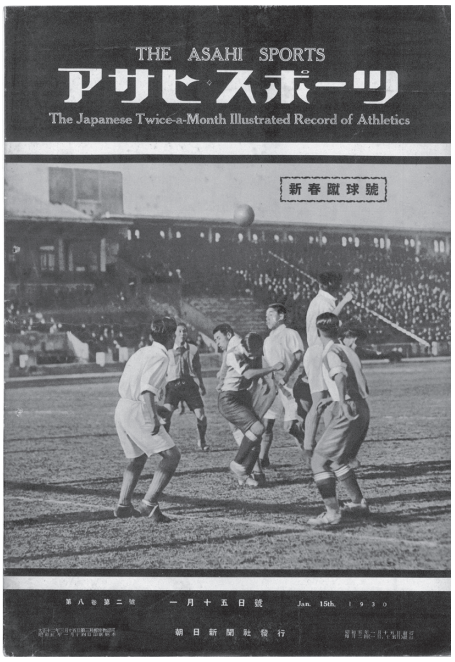
（昭和３年11月、東大上海遠征）　上海での練習風景

神戸埠頭から出航



昭和２年度優勝の東大チーム

昭和５年度、5シーズン連続で覇権を握った東大チーム
（昭和６年１月１日号）

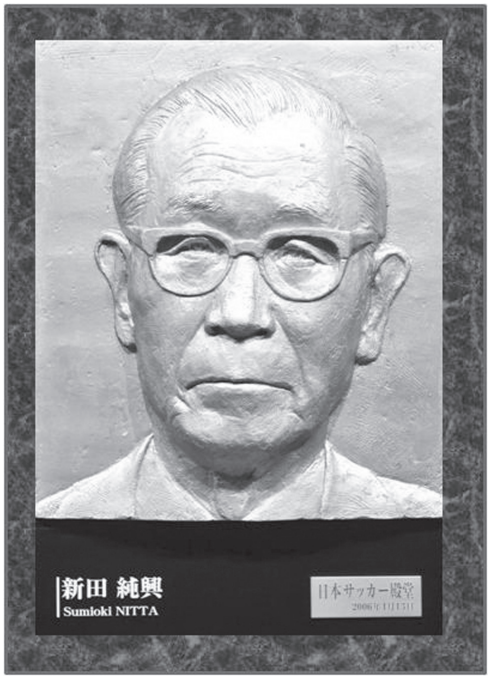


「アサヒ・スポーツ」の表紙になった昭和４年度、南甲子園の東大対関学王座決定戦
（昭和５年１月15日号）

昭和６年12月５日、東大３－１早大（神宮競技場）。
前半早大のコーナーキックをヘディングでクリア（昭和６年12月15日号）

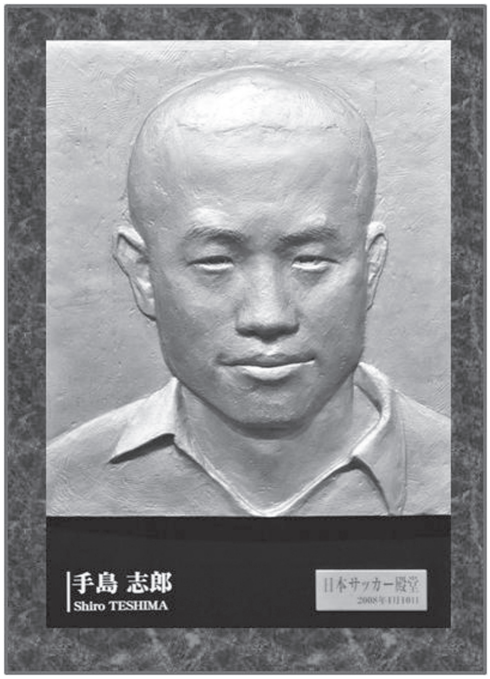
「アサヒ・スポーツ」掲載の写真は原板が残っていないため、朝日新聞社のご了解を得て、秩父宮スポーツ図書館所蔵の印刷物から複写しました。

日本サッカー殿堂入りした東大ＬＢ

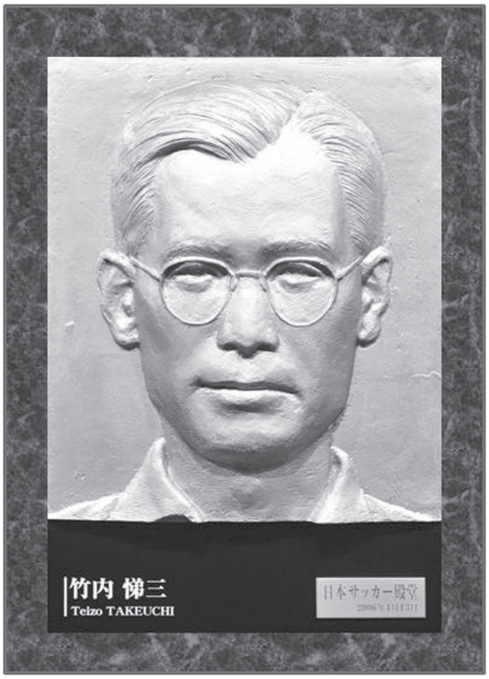


新田純興（にった・すみおき）
日本蹴球協会常務理事
大正11年卒業

野津　謙（のず・ゆずる）
日本サッカー協会会長、極東大会日本代表
大正12年卒業

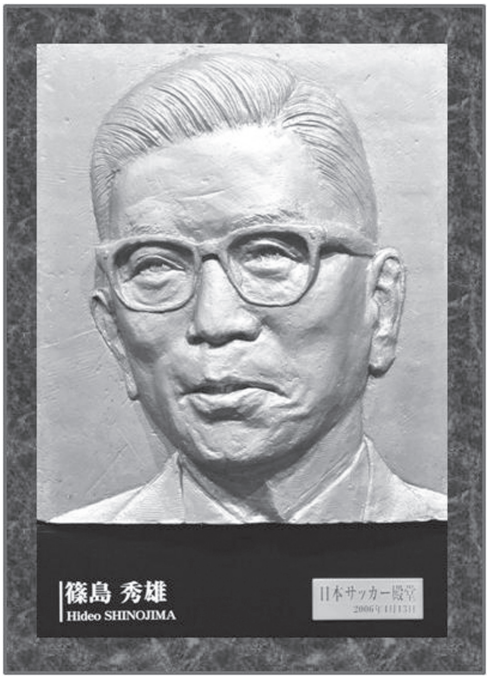


手島志郎（てしま・しろう）
極東大会日本代表
昭和７年卒業



竹内悌三（たけうち・ていぞう）
極東大会、ベルリン五輪日本代表
昭和７年卒業

竹腰重丸（たけのこし・しげまる）
日本サッカー協会理事長、極東大会日本代表
昭和４年卒業



篠島秀雄（しのじま・ひでお）
日本蹴球協会副会長、極東大会日本代表
昭和６年卒業

岡野俊一郎（おかの・しゅんいちろう）
日本サッカー協会会長、日本代表選手、監督、コーチ
昭和32年卒業

「日本サッカー殿堂」は、日本サッカーに功労のあった人を顕彰する制度で、毎年、数人ずつ選んで、日本サッカー・ミュージアム（東京都文京区本郷3-10-15　JFAハウス内）に、その彫像を掲額している。特別表彰部門は、歴史に残る顕著な功績を残した人を殿堂委員会で選考して推薦、競技者表彰部門はプレーヤーとして活躍した人を、殿堂委員会で選んだ候補者の中からジャーナリストなどの投票によって選出する。日本サッカー協会の会長は任期終了の時点で自動的に掲額される。

2008年度までに掲額されている東大ＬＢの７人のうち、野津謙、岡野俊一郎は、会長として掲額されているが、特別功労者としても掲額するに値する功績を残していることは明らかである。1963年以前の競技者は投票によらず特別功労者として選考している。竹腰重丸と篠島秀雄は役員としての貢献とともに競技者としての業績によって推薦された。

（掲額年）
第1回　2005年　野津、岡野、竹腰
第2回　2006年　新田、竹内、篠島
第5回　2008年　手島

第1回大学選手権に優勝（1952年度）

優勝したチーム　（後列）　立石、原、柴沼弟、浅見、中島、西本　（1953年１月６日）
（前列）　岡野、海老原、坪田、石井、柴沼兄

決勝戦、東大対早大、前半38分、早大・石田のシュートがバーに当たる（朝日新聞社提供）

東京大学のサッカー

闘魂90年の軌跡

巻頭言

遠い先　を　見る目
微な音　を　聞く耳
茨の道　を　拓く魂（こころ）
加えるに
己を責めるの努力

東大蹴球部の人達は、いつも、全身に全霊を打ち込んで正しい道、新しい道を切り開いてきた。

十一人集めるのがやっと、という時代に思い切って四校リーグの形を確立し、それを実行した。自分の学校にグラウンドも無いのに全国に呼び掛けて、高等学校選手権大会を決行した。

コレッジリーグ・大学連盟と歴史は変遷しても東大六年連続優勝の輝かしい偉業はいまだ誰にも破られていない。東大第二軍であるＬＢティームによって全日本選手権を獲得し、天皇杯の前身であるＦＡ杯を手にしている写真を仰ぐのも痛快だ。

毎年正月、霜を分け、氷を踏んで高校大会を運営した事は、満天下の青年を感激させ、幾多名選手を輩出し、日本の蹴球界に寄与した事正に計り知るべからずといって過言でない。

こうした貴重な部史が、今日まで、一本にまとまっていなかったのは、寧ろ、不思議でさえあったが、時到り、機熟して、ここに部誌が作製されたことは、洵に、洵に、喜ばしいことである。

然し、まだまだ、十分材料が揃ったという訳ではないので、横の連絡を密にして、もっと、完全な、面白いものに仕上げて行きたいと願っている。

記録が残っているなら、それは、記憶よりも価値の高い資料であり、自慢話を披露してもらえるなら、時代背景も知れて意義があり、批判、攻撃も亦、将来への発展上に欠かすことのできぬ鞭だと思われる。

どうか、此の一本を手はじめとして、部誌がいよいよ花やかな実のあるものに育っていくよう、大方皆々様のご協力を願いたい。

昭三八、一二、一八
新田純興

東大サッカー部誌「闘魂」創刊号より

東京大学のサッカー
闘魂90年の軌跡

目　次

90周年を迎えた東京大学ア式蹴球部 …… 1
1930年 極東選手権大会蹴球競技で１位…… 5
東大主力の極東大会優勝（1930年） …… 6
関東大学リーグ　６連覇の時代 …… 8
日本サッカー殿堂入りした東大ＬＢ ……10
第１回大学選手権に優勝（1952年度） ……12

巻頭言…… 15　　ごあいさつ ……18

第１部　歴史編

草創期に礎築いた３偉人
新田純興…… 20　　野津　謙…… 28　　竹腰重丸…… 36
東大サッカーの源流を探る…… 44
史上不滅の６連覇…… 47
国際大会で初優勝…… 51
歴史に残る大金星…… 56
座談会　東大サッカー　戦中・戦後の思い出…… 61
第１回大学選手権を語る…… 68

第２部　年代誌

1918年（大正７年）～
1920年（大正９年）…… 79
1921年度（大正10年度）…… 80
1922年度（大正11年度）～
1923年度（大正12年度）…… 81
1924年度（大正13年度）…… 82
1925年度（大正14年度）…… 84
1926年度（大正15年度）…… 86
1927年度（昭和２年度）…… 88
1928年度（昭和３年度）…… 90
1929年度（昭和４年度）…… 92
1930年度（昭和５年度）…… 94
1931年度（昭和６年度）…… 96
1932年度（昭和７年度）…… 98
1933年度（昭和８年度）……100
1934年度（昭和９年度）……102
1935年度（昭和10年度）……104
1936年度（昭和11年度）……106
1937年度（昭和12年度）……108
1938年度（昭和13年度）……110
1939年度（昭和14年度）……112
1940年度（昭和15年度）……114
1941年度（昭和16年度）……116
1942年度（昭和17年度）……118
1943年度（昭和18年度）……120
1944年度（昭和19年度）～
1945年度（昭和20年度）……121
1946年度（昭和21年度）……122
1947年度（昭和22年度）……123
1948年度（昭和23年度）……124
1949年度（昭和24年度）……126
1950年度（昭和25年度）……128
1951年度（昭和26年度）……130
1952年度（昭和27年度）……132
1953年度（昭和28年度）……134
1954年度（昭和29年度）……136
1955年度（昭和30年度）……138
1956年度（昭和31年度）……140
1957年度（昭和32年度）……142
1958年度（昭和33年度）……144
1959年度（昭和34年度）……146
1960年度（昭和35年度）……148
1961年度（昭和36年度）……150
1962年度（昭和37年度）……152

1963年度（昭和38年度）……154
1964年度（昭和39年度）……156
1965年度（昭和40年度）……158
1966年度（昭和41年度）……160
1967年度（昭和42年度）……162
1968年度（昭和43年度）……164
1969年度（昭和44年度）……166
1970年度（昭和45年度）……168
1971年度（昭和46年度）……170
1972年度（昭和47年度）……172
1973年度（昭和48年度）……174
1974年度（昭和49年度）……176
1975年度（昭和50年度）……178
1976年度（昭和51年度）……180
1977年度（昭和52年度）……182
1978年度（昭和53年度）……184
1979年度（昭和54年度）……186
1980年度（昭和55年度）……188
1981年度（昭和56年度）……190
1982年度（昭和57年度）……192
1983年度（昭和58年度）……194
1984年度（昭和59年度）……196
1985年度（昭和60年度）……198
1986年度（昭和61年度）……200
1987年度（昭和62年度）……202
1988年度（昭和63年度）……204
1989年度（平成元年度）……206
1990年度（平成２年度）……208
1991年度（平成３年度）……210
1992年度（平成４年度）……212
1993年度（平成５年度）……214
1994年度（平成６年度）……216
1995年度（平成７年度）……218
1996年度（平成８年度）……220
1997年度（平成９年度）……222
1998年度（平成10年度）……224
1999年度（平成11年度）……226
2000年度（平成12年度）……228
2001年度（平成13年度）……230
2002年度（平成14年度）……232
2003年度（平成15年度）……234
2004年度（平成16年度）……236
2005年度（平成17年度）……238
2006年度（平成18年度）……240
2007年度（平成19年度）……242
2008年度（平成20年度）……244

第３部　随想録

グラウンドと部室　今昔物語 …… 248
御殿下少年サッカークラブ 思い出の記…… 252
部長・監督 それぞれの思い…… 258
服部さん　いまどこに　居るんですか …… 268
ベルリン･オリンピック 竹内悌三
　妻の質問が描いたある情景…… 270　父の視線に見守られて…… 271
東大LB会　法人化のいきさつ …… 273
創部90年 おめでとうございます …… 278

第４部　資料編

定期戦の足取り …… 290
日本代表　東大が生んだ監督・選手 …… 294
東大出身の国際審判員 …… 298
活躍した“身内のチーム”の横顔 …… 299
年表 …… 308
東大ＬＢ会員 東京大学ア式蹴球部員名簿…… 314

ごあいさつ

一般社団法人　東大ＬＢ会理事長
浅見俊雄

東京大学運動会ア式蹴球部は本年（2008年）までに90年の歴史を歩んでまいりました。本誌はその90歳の卒寿を記念して刊行したものです。

これまでにも「闘魂」という名の部誌を５号まで発行してきました。本誌は、その記録をもとにしながら、新たに新聞や雑誌などに当時の資料を求め、またＯＢからの聞き取りなどから、90年の歴史を出来るだけ正確に残そうと心がけました。部の記録だけでなく、サッカーにかかわる、さまざまな東大の活動にも話題を広げたつもりです。

本誌の刊行で、巻頭言にある新田純興大先輩のご遺志にも、少しは応えることができたかと思っています。

この記念誌は２冊で構成し、１冊は各年代の記録と歴史を中心にまとめ、もう１冊はＯＢ、現役の寄稿を集めてサッカーに生きた青春を綴るとともに、これからの大学サッカーのあり方を探る内容でまとめました。

しかし、資料が散逸していたり、編集委員会の努力が十分でなかったりしたこともあって、過去の事実に関して、いくつもの欠損部分が残されてしまいました。期待されておられた皆様にお詫びします。これからも発掘の努力を続けて、将来刊行されるであろう年史で空白を埋めたいと考えています。

本誌の刊行に当たっては、盟友でもあったライバル校の関係者をはじめ、外部の方々にもご寄稿いただきました。そのほかにも多くの方々がご協力くださいました。本誌の内容をより充実させることが出来たことに厚く御礼申し上げます。

故篠島秀雄先輩の奥様、春枝様からは、本誌刊行のために多額のご寄付をいただきました。篠島先輩は、東大６連覇や極東大会の初制覇に活躍した名選手であり、後に財界の重鎮として、また日本協会の副会長として多大の貢献をした方です。

また北大ＯＢの瀬藤進一様、および東大の先輩の方々にもご芳志をいただきました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

東京大学ア式蹴球部は、伝統を受け継ぎながらも、学生サッカーの新しい姿を求め、東京都大学リーグで未来へ向けての挑戦を続けています。

ＯＢの組織であるＬＢ会の会員も、それぞれの立ち場、年齢にあわせて、サッカーを生涯の友として楽しんでいます。

これからも一層のご支援、ご協力を賜るようお願い申し上げます。

2008年（平成20年）12月